No.11
2002. 6. 1

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

■発　　行　特定非営利活動法人
地球の木 理事会
■発行責任　横川芳江
■編　　集　広報部
■事 務 局　〒222-0033
横浜市港北区新横浜2-8-4
TEL　045-471-5536
FAX　045-471-5543
E-Mail:CZR10753@nifty.ne.jp

CONTENTS

●ピンチをチャンスに　●ネパール調査報告　●JVCカンボジアプロジェクト終了報告　●支援地から
●開発教育チームは大忙し　●フィリピン青少年スタディーツアー　●INFORMATION

ピンチをチャンスに

一人が一人仲間を増やせば2,800人の大きな力に

副理事長　乳井　京子

エチオピアの飢餓支援をきっかけに「1ヶ月にランチ代500円の国際協力」からスタートした地球の木の活動は、多くの皆様に支えられ、昨年設立10周年を迎えました。

グローバリゼーションに対抗する、真に人間の尊厳に照準を合わせたピープリゼーションを目指して支援活動、国内活動に力を注いできました。その間に、ネパール極西部自立支援、カンボジアのチャーロッオプルダイ（チャイルドケアセンター）支援など顔の見える独自のプロジェクトも育ちました。昨今は、小中学校の総合的学習に年間を通して協力する機会が増え、開発教育チームも大忙しです。

支援地で学んだこと、経験したことをワークショップで伝える担い手も増え、開発教育に興味をもって集まってくる若い仲間たちの参加を得て、地球の木はますます活気づいてきました。

4月中旬には、四ノ宮浩監督の話題作「神の子たち」の自主上映をし好評を得ましたが、このようなイベントをボランタリーに企画運営する力がついたことは大変喜ばしいことだと思います。

しかし、手放しで喜んでばかりいられない厳しい現実もあります。日本の多くのNGOに共通する問題ですが、不景気、高齢化などの理由で毎年会員が減少し、現在は1,400人弱に落ち込んでしまいました。大ピンチです！NPO法人化を契機に自立した運営がますます要求されています。10年間活動してきたオルタナティブ生活館の2畳ばかりの事務所は、年々広がる活動を支えるにはあまりにも狭すぎて、スタッフたちは満足に座る場所もなく悲鳴をあげています。もう閉塞状態です。

スタッフが効率よく働け、ミーティングや勉強会ができ、

ニルマラさんの村で未来のリーダーたちと

ボランティアの方たちも気楽に集えるような拠点が不可欠ですが、現在、地球の木の台所事情は非常に厳しく、新たに収入を得る道を模索しなければなりません。地球の木は今、NPOとしての社会的責任を果たそうとジレンマの中で弛みない努力を重ねています。

私たちネパールチームの4人は3月末から4月にかけてネパール現地調査に行ってきました。そして、非常事態宣言の下、私たちよりももっと身動きのできない状況の中で果敢に活動しているSOARS（持続的開発のための行動と調査の会）のニルマラさん、シュレスタ教授たちと会って、ハッとさせられたのです。ニルマラさんは「国がこんな時だからこそ人材を育てて国を再建する準備をしなくてはならないのです」と、私財を投げ打って、永年の夢であった人材育成センターの建設に邁進していました。

「ピンチをチャンスに切り換える」ニルマラ・パワーに圧倒され、「女性たちの自立を支援する」などと偉そうなことを言っている私たちこそ、力を合わせて自立に向かって一歩踏み出さなければ、と肝に銘じました。今、一人ひとりが自分にできることを行動に移して、この難局を乗り越えましょう。

★苦悩の中に見える一筋の光

ネパールチーム　丸谷士都子

識字教室を多くの人に身近に感じてもらおうと始めた「デブラニ募金」に、170人を越える方々から49万円が集まりました。ありがとうございました。1月に識字教室訪問の計画を立てていましたが、11月末、ネパール政府は「国家非常事態」を宣言し、反政府組織マオイストに対して軍隊を動員した掃討作戦を開始しました。国民は様々な規制を強いられ、支援地の極西部では、識字教室はもちろん、すべてのグループ活動がストップされる事態となりました。3月末、4名でカトマンズを訪問し、SOARSスタッフと話し合いを行ないました。

★マオイスト★

マオイストとは、1996年に西部丘陵地帯を根拠地として結成された毛沢東主義派のグループ。立憲君主制の廃止と共和制の樹立を目標に武装闘争を進め、貧しい山岳地帯の農民に支持者を増やし、国土の四分の一を支配しています。現在約1万人の兵士がいると言われ、6年間で政府軍とマオイスト合わせて3,500人以上の死者が出ています。

リソースセンターで女性グループとワークショップ

★支援地カイラリ郡にも影響は濃く★

地方では夜間外出禁止令が頻繁に出され、要望は強いものの、夜おこなわれる識字教室は実施できませんでした。多額の資金が下りる国際NGO活動も襲撃対象になります。地球の木・SOARS のプロジェクトにもマオイストがさぐりを入れに来ましたが、少ない資金で村人のために行なわれていることを知り、今のところ被害はありません。しかし、村人たちの他人に対する警戒心、不信感が強くなっているようで、回復に時間がかかることが予想されます。電話搭の破壊により、連絡も容易ではありません。

★コミュニティセンター★

1999年暮に建設が始まったニムディ村のコミュニティサービスセンターは、地球の木のNPO設立を記念する事業であり、私たちの気になるところです。地球の木の支援金により、建物自体は完成しました。残りの窓や柵、内装のための不足資金は、行政村の予算から出る予定でしたが、国家の防衛費に予算が使われたため、削られてしまいました。資金があると見られるとマオイストの関心を呼ぶため、今はボランティアで手作業の仕事しか進めることができません。

★平和な国づくりに向けて★

悲観的な材料が揃っているネパールの状況の中、SOARSのニルマラさんたちは、情熱を持って地域づくりに貢献できる人材を育てようと、カトマンズ近郊イマドールに人材育成センターの建設を進めています。5月中には完成予定のこのセンターでは、今までSOARSが培ってきたノウハウを駆使し、NGO運営のためのトレーニング、地域活動に携わる人たちのトレーニングをはじめ、開発の概念、技術など、多岐に亘るメニューを用意しています。このセンターから数多くの志を持ったリーダーたちが育つことを期待して、これからも応援していきたいと思います。将来的には、地球の木とワークショップの交流や研修なども行なっていければと夢は広がります。

市民の力で平和を取り戻した！

JVCカンボジア<持続的農業と農村開発プロジェクト>終了報告

理事長　横川　芳江

2001年度「プロジェクト見直し委員会」（座長・米林大作理事）からの答申を受け、JVC（日本国際ボランティアセンター）カンボジアに関しては一定の目標に達したとして2001年度で支援を終了することになった。

それはPKOから始まった

今、国会では「有事法制」など日本を根底から変える法案が審議されている。ちょうど10年前の1992年、国会ではPKO法案の審議が大詰めを迎えていた。生活クラブ神奈川総代会で、「何らかの意思表示が必要ではないか」との発言を受けて「カンボジア市民調査団」が結成された。

当時「国際貢献」が叫ばれる中での自衛隊派遣であったが、「調査団」は軍隊ではなく市民の手による「協力」と農村の復興こそが大切であると考え、ガイド役であったJVCの村づくりを支援することになった。20年にわたる内戦で知識人の殺害や共同体の破壊が行われ、人々の信頼関係を取り戻すことが重要であった。このプロジェクトを地球の木が引き受けることとなった。

JVCは80年代、タイ国境の難民支援から、援助が入らず困難を極めていたカンボジア国内の支援活動に移行していた。井戸掘り、自動車技術学校、農村開発など、日本のNGOの先駆的な役割を担っていた。

私たちは村の人々に会って、「生きる」エネルギーと「平和」への希求を感じ、NGOが自立を支える支援を行うことの重要性を感じ取った。

熱い思いに動かされて

JVCの農村開発も持続可能な農業を含む、「SARD」（Sustainable Agriculture Rural Development）に発展し、さらに地球の木の意向を受け、SARDの中でも女性の自立を促すプロジェクトが始まった。

この間、各地域、50数ヶ所で報告会を行い、会員拡大を図り、またバザーやカンパ活動、シンポジウムの開催などで、200万円の資金を集めたり、日本のODA（政府開発援助）による農薬援助に反対する要望書を約1万名の署名とともに外務省へ提出したりした。また、「地雷廃絶」キャンペーンに参加し、1万5千名の署名を外務大臣に届けた。

育ってきた信頼と助け合い

2002年4月の現地からの報告では、女性の相互扶助グループにおけるクレジットの返済率が上がり、女性たちがより貧しい人々へ働きかけをしていることが伝えられた。また、米銀行では「自分は米が足りているけれど、足りない人のために参加する」と言う人が出てきているという。自分が食べることで精一杯だったのが、心のゆとりとお互いに助け合うしくみが出来ている。このことは、人が育つ、人と人との信頼関係を取り戻すといった内面的、根源的な人間性の回復がなされてきているといえるだろう。

10年前、共同体の復興を願って始めた支援であったが、まさに今、村の中に相互扶助の仕組みが出来てきたことを実感し、感慨深い。

カンボジア王国自体、政情の安定や選挙制の確立、ASEAN加盟など、国際社会から認められてきている。経済のグローバル化の波をどう受け止めていくか、課題も大きいが、人々がそれぞれの地域の中で自立していくことで、きっと解決していくものと思う。

「平和」を願う行動から始まったカンボジアプロジェクトだが、今こそ「平和」の意味が問われている。「軍事力ではなく人と人との信頼と協力」こそ「平和」をもたらすものということを教えてくれた。

JVCのSARDプロジェクトは、地球の木として、ここに一つの区切りをつけ、これからは「るしな」のチャイルドケアプロジェクトを通して、カンボジアを見続けていきたい。

長期にわたりご支援いただいた皆様に深く感謝いたします。

支援地から ●●プロジェクト最新情報●●

フィリピンから

「ツブラン」の名に込められた願い

ネグロス島ブノブハン村はサトウキビ畑と水田の緑がとてもきれいなところです。私たちスタディーツアーメンバーがお世話になったのは、チェアマンのアーネルさんの家。家の横には、ツブラン農場から来た豚が3頭飼われています。2日目に村巡りをした時には、ツブラン農場で研修を終えた卒業生たちが丹精込めて作っている豆類やナス、ニガ瓜の畑を見せてもらいました。棚田もしっかりとできています。また、プロジェクトの一つであるミミズ堆肥も作っているということでした。

その3日後、ツブラン農場でマネージャーのエドガーさんに運営についての話を聞いたり、農場見学をしました。循環型農業の様々な取り組みと、その実現に向けての努力をひしひしと感じました。町から貰い受けた生ごみに*BMWをかけ、堆肥を作るということもしているのですが、気になったのはそのごみの中にビニールやプラスティックの物がたくさん混じっていること、ネグロスではごみを分別するという意識がまだあまりなく、農場で分別しても、一旦運び込んだものは持っていってくれないということでした。この島で循環型農業を根付かせるには一筋縄ではいかない難しさを感じました。しかし、卒業生の「サトウキビ労働者として働いていた時より、自分たちの土地を手に入れて農業をしている今のほうが頑張っただけのものがかえってくるからよい」という言葉と、「ツブラン=泉」に込められた思い(泉から水が涌き出るように、ツブラン農場から若い研修生がどんどん巣立ち、新しい農業が広がることを願って名づけられた)を考えたとき、支援することの意味を改めて感じました。

（ほくぶ　武安　ますみ）

＊BMW技術　家畜の糞尿等を岩石の間を何度も通し、バクテリアのはたらきでミネラルが豊富な水にする技術。その水は人や家畜の飲み水になる他、肥料を作る時にも利用される。

プロジェクト名　●ネグロス島ツブラン農場支援

カンボジアから

楽しかったよ！お正月！ただいま16人、皆元気です。

元気一杯な子ども達と寮母さん

4月14日は、クメールの正月です。10日から21日までお休み。国をあげてお正月を祝います。チャイルドケアセンターの皆は、以前住んでいた親戚の家や友人の家に戻ってまず3日間を過ごしました。2名だけが戻る所がありませんでしたので居残りとなりました。子どもたちは、それぞれ3,000リエル（約100円）のお年玉をもらいました。日本のNGOから新しい服が何人かにはプレゼントされました。

3が日が過ぎた頃、ピックアップトラックで全員を迎えに行き、オ－プラサ・プノン・トム寺では、[illegible]し飼いのサルに餌をやったりしました。その後、バント－ラーウ寺では、たくさんの参詣者が集まって綱引き、米袋をはいての競争、鬼ごっこなどのゲームを楽しんでいるので、子どもたちも参加しました。また、最近習った、伝統的な踊りを披露し、皆で踊りました。このお寺もうでの時もお小遣い（2,000リエル66円）を渡しました。

皆の住むトロ村では、4晩続けて踊りとボクシングの催しがありました。伝統的なものから、タイのものまで音楽に合わせて踊りを続けます。ボクシングは，腕力を競うもので、昨年は子どもも出ましたが、今年は寮母のサレッの指導により、禁止しました。本気で殴り合って怪我をしたり、お金をもらったり、大人が賭けをしたりするからです。今年は、お寺もうでと帰郷に、お金をつかったのでお正月の特別料理はありませんでした。

（ほくぶ　小泉　恵子）

●バッタンバン州のチャイルドケアセンター支援

ラオスから

隣国タイへのスタディーツアー 自分たちの良さを再発見

カンボジア・ベトナムなど5ヶ国に囲まれているラオスは、インドシナ半島では最貧国です。識字率も決して高いとは言えず、情報で溢れている日本とは異なり情報も大変限られています。カムアン県の支援先では、毎年村人や役人を対象に人材育成のため、タイやベトナムなどへスタディーツアーにでかけます。

11月にはカムアン県農林局職員、女性同盟、JVCラオス現地人スタッフの女性4名とJVC現地スタッフの男性2名計6名とでタイ北部の日本人が自然農業を営む谷口農園をはじめ、パイナップル果肉加工女性グループや大豆栽培農家などを視察しました。谷口農園での堆肥作りはすでにカムアン県でも行われています。また、防虫対策も3ヶ村で行っていますので、特に熱心にメモを取ったり、細かな質問を出したりしました。防虫対策のタイ語の資料をもらい、帰国後に翻訳してカムアン県でも活用する予定です。

参加した女性たちは、タイの農民は借金をして規模を拡大しているが、ラオスの農民は規模は小さいが借金がないことや市場の違いを理解しました。また、タイのいろいろな女性グループ活動を視察できたり、エイズの現状を見てラオスでもエイズ患者が多くなることを予想できたり、収穫の多いスタディーツアーでした。

（ほくぶ　飯田　信子）

●カムアン県　森林保全・自然農業・農村女性の自立支援

ネパールから

ニルマラさんの活動の原点 イマドールを訪ねて

首都カトマンドゥより車で1時間程の所にイマドールがあります。私達の活動の協力者であるSOARS代表ニルマラさんの住んでいる所です。完成間近い人材育成センターに、30人以上の女性達が仕事を休んで集まってくれました。

識字教室からスタートした3つのグループの内の1つは、石鹸づくりに挑戦していました。香草や花などを使った香付け、灰を入れたものと入れないものを作るなどしていました。もう1つのグループでは毎月皆で50ルピー（85円）を積み立てていました。その中からお金を借りて養豚を始め、成功している女性もいるそうです。

このようにイマドールの女性達はパワフルです。ニルマラさんの生き方から大きな影響を受けていると感じました。親近感のある指導者なのだと。

しかしこの元気な女性達も「家では、夫が1日の稼ぎをお酒に変え、飲んでは暴力を振るう。何とか助けて欲しい」と訴えていました。シュレスタ氏によると、これはカーストの低い男性によくある現象で、日頃社会で抑圧されている者が、家庭の中で弱い人に当たり、暴力を振るってしまう。高いカーストではこの様な問題は無いそうです。

また、カーストの低い人々は、ニルマラさんに相談がある時でも、庭先にも入ってこないそうです。まだまだこの国には、身分制度が強く残っていて、それが人々の生活に大きく影を落としているのだと実感しました。今、ニルマラさん達は、この地区の男性達に対しても、男女で協力し合う方向に向けて働きかけをしています。私は、周囲の人たちに「地球の木」の活動をもっと積極的に語っていくことが、女性の未来を変えていくことに繋がると改めて確信しました。

（湘南　堀ちづる）

●カイラリ郡極西部の村人のための自立支援

開発教育チームは大忙し

三保小でのマジカルバナナのワークショップ

いま開発教育チームが、地道に、しかし、とても活発に活動しています。そんなチームのことをリーダーの中野さんが報告します。

出前講座の依頼が殺到！

開発教育チームは2001年4月、マジカルバナナ販売チームがそのまま移行して誕生しました。それまで地球の木の開発教育の担い手であった後藤雅子さんが引っ越されてリーダーを失い、後に残った我々は、手探り状態で闇夜に放り出されたようなはなはだ不安な船出でした。それでも6月には平楽中、7月には三保小と次々に出前講座の依頼が入り、とにかくこなしていかなければなりません。秋以降も鎌倉女学院、善行中、市場中、と学校現場での国際理解講座を担当し、川崎国際交流協会、ピナット、WEショップ、ゆめコープなど学校以外の団体からも子どもと大人を対象にしたワークショップの依頼がありました。

勉強を重ねながら…

その内容は、マジカルバナナ（クイズやロールプレーを中心とした組み立て）、ネパール家族ゲーム（識字体験）、ネパールわくわくバッグ、ネグロス島のくらし（グッズや写真を使って）、平和、貿易ゲームなどです。専門家ではない私たちには、自分たちの中にじっくり蓄積したものをはき出すという余裕は元々なく、目の前のやらねばならない講座のために勉強し、皆で深く考えて話し合い、ワークショップという形に作り上げていきました。そして実際に学校で参加型ワークショップを実践してみても、思うように生徒たちに参加してもらえず、また工夫を重ねる。開発教育では学習結果よりその過程を重視します。ひとつの正しい答えを教えるのではなく、話し合いの中でその現状や原因を理解し解決策を考えます。この過程で我々も多くのことに気づき、考え、行動していきました。開発教育する側も開発されていったのだと実感します。

うれしい学校との連携

開発教育チームとして大きな収穫は、学校との連携プレーが徐々に確立されてきたということでしょうか。三保小を例にあげると、小学生を対象にしたワークショップは初めてだったこともあり、事前に先生との話し合いがかなりでき、学校側の年間を通してのカリキュラムの中に地球の木が位置づけられました。講座の後も子ども達の質問に答えるというかたちで継続的に接点を持つことができ、3学期の発表会の参観で私たちの投げかけがどのような形に育っていったかをこの目で確かめられました。学校側の問題点なども少々わかりそれまでの1回限りの出前講座での関わりと比べて大きな前進となりました。他の学校も引き続いて担当することになり、先生方との信頼関係も深まりつつあるなか、先生方を対象にワークショップをする計画も出てきています。先生方も巻き込んで、一緒に教材研究などできたらと考えています。

若い仲間たち

もうひとつ特筆すべきは、ここのところ開発教育に関心を寄せる若い方たちが、積極的に仲間になってくださったことです。彼らの言葉で次世代の子ども達へメッセージを伝える日もそう遠くないと期待しています。

（開発教育チームリーダー　中野真理子）

フィリピン青少年スタディーツアー
―――4月1日～7日―――

お互いを知ることから何かが始まる

コーディネーター・義澤　孝子

ちょっと不安だった出発時

「フィリピンは今危ないんじゃない？」そう友人に言われながら出かけた今回のスタディーツアーだった。マニラ空港は手荷物チェックこそ厳しいものの、ぬけるような青空と送迎に繰り出した人垣で、以前降り立った時と何ら変わりなかった。しかし国内線に乗り換えた機内で目にしたのが『昨年放送関係者が2人、アブ・サヤフのテロ活動の犠牲者となり、今やフィリピンは世界で3番目に多くの犠牲者を出している』という日刊紙の記事。これから行くネグロス島に住む人たちの生活にも影響があるんだろうか？　不安が頭をよぎった。

ゆったり時間が流れるビノブハン村

ホームステイしたビノブハンでは、着く早々あたふたし、後で笑い話。6時からの打ち合せの前に、現地参加者のドナルド君に招かれ、何人かで彼の家に散歩に出た。でも私たち日本人は時間を気にし大急ぎで戻って来たのに、村の人たちは誰も集まっていない。この地で3日過ごす内に時間の流れの違いに気がついた。日本で言う「晴耕雨読」。季節によって農作業などの手順は決まっていても、細かい時間の使い方は個人の自由。時間には実に大らかなのだ。

村長のアーネルさん宅では毎朝5時半にはラジオをかける。ラジオは大きな情報源。でもアブ・サヤブ（フィリピンのイスラム原理主義過激派）の話をする村の人はほとんどいなかった。

本音で語る

村の人たちとの膝をつき合わせた語らいから、いろいろな彼らの心配ごとや関心事を聞くことができた。「我が子の教育とお金の無いこと」（子だくさんの母）「やっと土地の権利を取り戻したが、これから35年かけて土地代金を払わねばならない。農業などがうまくゆかねば借金が増えるかと心配」「フィリピンはワイロがまかり通る政治。日本はどうなのか。地方の行政や自治は整っているか。外国人の参政権はあるのか」（山形で農業研修をしたバナナ山のボイさん）「どの作物をどう作るのか。まだ解らないことが沢山ある」「やればやっただけの毎日を頑張りたい」

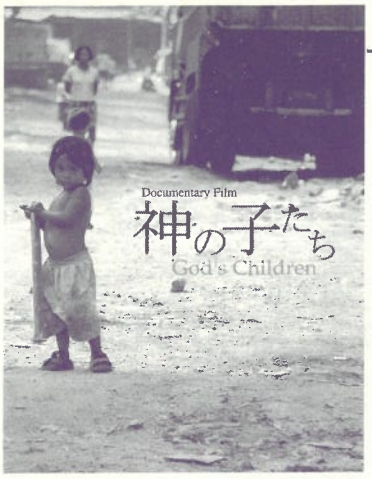
お祭りみたいに賑やかな3日間

日本から参加した若者*達と、迎えてくれたビノブハンの若者達は、びっくりする位すぐ打ち解けて貴重な3日間を共に過ごした。家事手伝いや畑仕事、ワークショップでの話し合い、夜はダンスに歌など。とにかく遠い日本から青少年が来て、村に泊まるというのは珍しいことで、沢山の人たちが集まりまるでお祭りのようだった。

地球の木の生い立ちや活動に興味を持ち、質問するお母さん。ランプの明かりで日本の本を読み勉強していたボイさん。日々の問題にひとつずつ取り組み努力している中から出された貴重な声。そして日本語とイロンゴ語のにわか教室があちこちで大にぎわいのビノブハン村だった。皆に幸あれ！

＊高校生2、大学生2、その他学生2、計6名（女5、男1）

村長さんの家の前の畑で、みんなで草とり



「神の子たち」自主上映会が盛況のうちに終了いたしました！

「神の子たち」自主上映実行委員会

地球の木主催の「神の子たち」自主上映会は皆様のご支援のおかげで、両会場とも盛況のうちに無事終えることが出来ました。両会場で書いていただいた感想はどれも感動にあふれるものでしたが、そのうちのいくつかを掲載させていただきます。

●かわいそうとか、ありふれた言葉では、言い表せないほど強烈でした。問題がとても深く難しいと感じました。知ることができ、よかったです。 20代男性

●もっと沢山の人に、「神の子たち」を観てほしいと思います。日本人は、心の豊かさを物の豊かさとはきちがえているのではないかと思いました。自分ができる事は何か、考えてみようと思いました。 10代女性

●富の公平化が、早く実現するよう祈る。このドキュメンタリーが、学校で上映されるよう祈る。 40代男性

●想像を絶する生活があることに言葉を失った。そこでたくましく生きる人々に胸を打たれた。こんなことがあっていいものか。 40代女性

●現実なのだけれど、見るのがとてもつらかった…というのが正直な感想です。まずは自分の生活を見直す、ここからのスタートでしょうか… 40代女性

●同じ地球に住んでいる人間として、彼らに謝らなければならない。 50代男性

INFORMATION

カンボジアプロジェクト報告会

子どもたち元気です。でも…

るしなこみゅにけーしょん・やぽねしあ
代表 松本清嗣氏帰国報告会

大量消費経済がもたらしたものは、学校はできたけど行けない子ども、エイズの蔓延による弧児、公的支援金の大幅減額、使えない援助金…

市民の自立を促す協同組合作りに心血をそそいできた松本氏の話を聴きにきませんか。ビデオの上映もします。

日　時　　6月12日（水）
報告会　　10：00〜12：00
昼食懇談会　12：00〜2：00
場　所　　サポートセンター706号室

ネパール募金にご協力ください

郵便振替口座　00260-5-14129
加 入 者 名　地球の木キャンペーン
＊振替用紙に募金名をご記入ください

デブラニ教育募金

1口　1,000円（何口でも）目標50万円

「地球の木の支援が私の人生を変えました」と語ってくれたデブラニ。識字教室で目覚め、学校に行き始めたデブラニの後に続こうとするネパールの女性たちの教育、自立支援に使われます。

人材育成センター募金

1口　1,000円（何口でも）目標100万円

これからのネパールを支えるリーダーを養成するセンターをカトマンズ近郊に建設中です。情報発信基地ともなるセンターのためのコンピューター、ファックス、コピー機などの備品に使われます。

本の紹介

「そうだったのか！現代史」

池上彰著　集英社　1,700円

再三テレビの画面に映る瀋陽の日本総領事館の映像を見ながら、「亡命の意味は？」ベツレヘムの聖誕教会解放のシーン。「なんでイスラエルの人がアラブ人の土地に移り住んだのか？」知っているつもりでも子どもに聞かれたらきちんと答えられない。背景を知るのにワイドショーの情報のみに頼るわけにはいかない。と言って難しい歴史書をひも解くのはおっくう。そんなめんどくさがり屋にぴったりなのが、この本。著者はNHK週刊子どもニュースの解説者。「現代につながる歴史を、若い人に知ってもらいたくて書いてみました」とあとがきにあるが、現代史をきちんと勉強しなかった我々も「そうだったのか！」と納得する場面が多い。これからの世界の行方を考えるためにも必読書である。（S）

事務局よりお願い

●ホームページをリニューアルしました。地球の木の学習会や最新イベント情報はホームページをご覧ください。
http://homepage1.nifty.com/EarthTree/index.html
●転居される場合は新しいご住所を必ずご連絡下さい。　●会費の自動引き落としをご希望の方はご連絡下さい。

本紙は古紙配合率100%の再生紙を使用しています